

ほ におい 穂 香 タイムス <4月号>

北方四島交流センター（ニ・ホ・ロの最近の出来事）

北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）はオープンから今年で14年目を迎えております。

開館以来、今年の3月末までに延べ入館者数は511,068人の入館があり、年間平均では約4万人の方々にご利用いただいております。

これまで、ビザなし交流で訪れる日ロ双方の訪問団の皆さんをはじめ、政府の要人も視察されるとともに、元島民や関係者との要望・懇談会など数多く開催されています。

平成25年度からは新たなスタッフも加わり、多くの皆様のご来館をお待ちしております。



全国から「北方領土青少年現地視察団」が来館。

全国の青少年等に北方領土問題を身近にとらえてもらい、返還運動を継承してもらうことを目的に、北方領土問題対策協会（北対協）が取り組み、全都道府県民会議を主体に実施されている事業です。

小学生から大学生までを対象に視察団を編成し、北方領土隣接地域である根室管内を訪れています。

二・ホ・ロでは、館内視察・元島民からの講話のほか、地元高校生による北方領土授業などが行われています。

◆ 富山県民会議（青少年現地視察団）の皆さん。

3月24日、富山県民会議（会長 山辺美嗣 県議会議長）が実施する「私たちと北方領土」作文コンクールで入賞した県内の中学生 20 名を含む一行（30 名）が来館しました。



◆ 滋賀県民会議（青少年現地視察団）の皆さん。

3月26日、滋賀県民会議（会長 佐野高典 県議会議長）が実施する作文コンクールで入賞した県内の中学生 19 名を含む一行（23 名）が来館しました。



◆ 奈良県民会議（青少年現地視察団）の皆さん。

3月26日、奈良県民会議（会長 新谷紘一 県議会議員）が率いる県内中学生 15 名を含む一行（21 名）が来館しました。



※ 参加した各県民会議の生徒たちは、元島民からの講和・地元高校生による北方領土授業そして館内説明員の解説に耳を傾け、熱心にメモを取るなど返還運動を継承する大切さを学んでいました。

網走青年会議所「北方領土研修 in 根室」

3月23日、網走青年会議所が実施している高校生向けの「北方領土研修」事業で、網走市と小清水町の高校生 16 人を含むその一行、約 50 名が 二・ホ・ロを訪れました。



生徒たちは、歯舞漁協の漁業取締船に乗り、納沙布岬沖の洋上から北方領土を間近に望んだ後、二・ホ・ロを訪れ、当館の専門員である高橋孝志（歯舞群島勇留島出身）から、当時の島の様子や島から引き揚げてきた時の様子など講話を聴いたあと、説明員の案内により館内を見学しました。

翌日には、地元高校生との意見交換など北方領土学習を行うなど、北方領土問題に対する認識を深めていました。

お知らせ

フリーマーケットを開催します。

資源リサイクルの一環として、宝林町会主催による「第12回リサイクルパートナー宝林フリーマーケット」が開催されます。

野外で開かれることの多いフリーマーケットを室内の広くてキレイな会場で体験してみませんか？

多くの方々のご来場をお待ちしております！！



- 日時 平成25年5月12日(日) 午後1時～3時
会場 道立北方四島交流センター(二・ホ・ロ) 2階交流ホール
参加料 1区画(2m×2m) 500円
(20区画が埋まり次第受付終了となります。)
問合せ 申し込みは 二・ホ・ロまで、 TEL23-6711

新年度版北方領土啓発資料

外務省発行の「われらの北方領土」2012年度版が届きました。



北方領土の歴史、日ソ・日露間の外交交渉の経緯を含め、最近の北方領土をめぐる動きを掲載しています。(B5版 123ページ)

資料編には、日ソ・日露間の首脳・外相会談一覧や主要事項年表、北方領土関連の条約・宣言などを掲載し、北方領土問題を理解するための情報を満載しています。



◆ 資料をご希望の方は、二・ホ・ロまでお越しください。

はばたく折り鶴 四島返還の祈いをこめて！！

釧路市在住の伊勢さんより、折り鶴の寄贈がありました。

この折り鶴は 二・ホ・ロに来館されるお客様、四島在住のロシア人の方へという伊勢さんのご厚意によるもので、平成 18 年から度々当センターを訪れた皆さんの折り鶴を寄贈されております。



このたび頂いた折り鶴は、尾を引くと羽ばたくようになっており、お客様からは「是非おみやげに」と人気を集めています。

「北方領土」豆知識

■ 北方領土の歴史

日本が北方の島々のことを知ったのは、17世紀初めの頃です。現存する地図の中で北方領土が表された最も古い地図は、1644年（正保元年）に松前藩が幕府に献上した「正保御国絵図」で、この地図の中には「くなしり」「えとろほ」「うるふ」など39の島々が記されています。これは、ロシアのスパンベルグ達が千島列島に沿って北方領土一帯の探検を行い地図を作成した天文4年（1739年）より百年も前のことです。

18世紀（1700年代）の後半になると、幕府は、みずから北方の島々の経営に本格的に取り組むようになり、国後島、択捉島を中心に最上徳内、近藤重蔵、高田屋嘉兵衛らの勇敢な日本人が活躍しました。

1798年（寛政10年）、幕府は大規模な調査隊を派遣し、この時、近藤重蔵は最上徳内を案内役として、共に国後から択捉島にわたって調査をしましたが、そのとき、タンネモイに「大日本恵登呂府」と記された標柱を建て帰りました。

更に、1800年（寛政12年）に、高田屋嘉兵衛が国後・択捉島間に苦心して開拓した航路により、ふたたび択捉島に渡りましたが、このときもカムイワッカオイの丘に同じような「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建てて日本の領土であることを明らかにしました。



「大日本恵登呂府」の標柱
写真は昭和5年、択捉島薬取村の人々による記念の建碑



最上徳内



近藤重蔵



高田屋嘉兵衛

以上のような歴史的事実と当時の実情を踏まえて、1855年（安政元年）、幕府とロシアとの間に「日露通好条約」が結ばれ、日露両国の国境は正式に択捉島とウルップ島の間で定められました。